

## 【訳者覚え書き】

『ブルームフェルト ある中年独身男』と  
『聖なる酔っぱらいの伝説』

山 中 博 心

フランツ・カフカ

『ブルームフェルト ある中年の独身男』  
(1915年)

物語の語り手は読む者を、その話の流れの中に引き込もうとする。中立的で客観性を堅持し続ける語り手はいないであろう。もしそんな語り手がいたとするなら、語り手は自分の存在を否定していることになる。「あいつ語りやがって」、とか「語りに落ちる」という言葉に表されているように、語りはいつも誰かに肩入れしている。それは物語の主人公への共感や反発である。

とくに神を中心とした予定調和に裏打ちされた時代が終わり、価値の相対化が顕著になった20世紀の物語には収束した結末がない場合が多い。第三者的語りの裏に極めて主観的な意味を浮き上がらせる物語もあれば、主観的な色彩が強いように見えて、実は誰もが共有できるような普遍的な世界が描かれている作品もある。近代小説の成立条件として挙げられているのが人間の「善意」であるとすれば、20世紀は多様に見えて実はモノトーン的な単色の個人の思いが支配していると言える。

その典型とされているのがカフカである。主人公の視線に第三者の語り手の視点重ねることで客観性を装いながら極めて主観的なモノロークの世界が読者を惑わす。1915年に書かれた『ブルームフェルト、ある中年独身男』は自分が向き合う全てものを自分の価値尺度によって意味付けてしまう。自分の殻を強固に固めれば固めるほど、不安定さを醸し出さずにはおれないカフカの文体の特性。接続法第二式、話法の助動詞、心態詞、体験話法などなど描かれている世界は他者との関係を絶った独我的世界としか言いようのない動きのなさ。世界をあるがままに受けとめられず、自分にとって都合の悪いことは視界の中から消し去ろうとする主人公たち。

犬を飼うことのプラスとマイナスをいろいろと思い悩んで、結局は決断できずに独り暮らしに甘んじ、疲れた身体を7階の部屋まで引きずり上げる毎日。偶然帰宅した時に自分の部屋から聞こえてくる物音に心を動かされる。どういうわけか2個のセルロイドのボール、カフカ

の作品にしばしば登場する2という数字。『城』におけるふたりの助手然りである。極めて個性的な主人公と対照的な個性のない相似的な2というペア。

ブルームフェルトの心の中を見透かすように彼の動きの裏をかくようなボールの動き。突然自分の思考の中に収まらない事態に遭遇して放心状態にある主人公。見方をかえれば彼があれほど求めていた従順な同伴者ではないのか。タンスの中にフェイントをかけて閉じ込めようとしたり、その存在すらが疎ましい掃除女の頭の巡りの良くない息子にボールの殺生与奪権を与えようとしたりする。ボールと一切無関係でありたいという願望はカフカの他の作品の主人公の特性でもある。ボールの跳ねる音を聞きたくないため耳栓をする。そうした幾分滑稽に思える行動は彼の心の動揺をも表している。「何と彼の思考は混乱していることか！そしてこれは単に良く眠れなかった夜の所為だ！」という体験話法によって語り手は主人公と二重写しになる。

自分に有利なように解釈して行く。否定的であった人物も別の文脈の中に置かれると肯定的になる。いつもより早く会社につけたことをあのさっきまで厭わしく思っていたボールに感謝する。彼の中ではそうした矛盾はなんの問題もない。そうかと思えば事態が変わろうと頑に態度が変わらず、いわば「坊主憎けりゃ袈裟まで憎い」ことになる。アルフレットという名前は「その少年と関係するもの全てがそうであるように滑稽である。」

策略や意図、そうしたもので物語を編み上げて行こうとする。会社の中でも見習いを付けてほしいということで、雇い主とうまく行っていないだけでなく、同僚たちにも悪意を感じ、自分が過小評価されていると思い込んでいる。これは彼がそうした人を過小評価していることの裏返しに過ぎぬとも言える。見習いは「やる気がなく」、いつも監視していなくてはならないと思っている。何故なら、「見習いたちは上役の注意深さを欺こう、騙そうとする」からである。こうしたブルームフェルトの反応は彼等から見れば「ひどい仕打ち」でしかない。そんな人間関係のなかで彼の気持ちはいつも「恐れ」と「自己満足」の間を揺れ動いている。とどのつまり彼が

から見れば、「二人の見習いは過度に不安がり、思いやりなど微塵もなく絶えず自分たちの権利を守ろうとする、それは実際上の権利なのかそれとも見せかけの権利なのか。」しかし彼の目を通して語られる物語全体がそもそも「現実」なのか「見かけ」なのかが定かではないし、二人の見習いの縫子に対する好き嫌いはブルームフェルトの物事に対する好き嫌いそのものである。

カフカの作品は『父への手紙』(1919年)に象徴されるように対立の構図であり、必ず「正しい」か「誤り」かが問われているが、そのことの決定は留保されたままである。いわば一方の主張が攻勢になればなるほどもう一方の言い分が信憑性を持ち始めるのがカフカの作品の特性と言える。

ヨーゼフ・ロート

### 『聖なる酔っぱらいの伝説』(1939年)

カフカの『ブルームフェルト』とは対照的に人間の善意の上に成り立っているのが『聖なる酔っぱらいの伝説』である。「意図」や「作為」といったものに替わって偶然や恩寵と行ったものが物語の原動力になっている。

人間にはどうすることも出来ないことに対しては人間を超えるものに任せるといふ姿勢が伺える。「何故だか分からないが」と語り手は言う。全てが分かっているという態度で世界に向き合おうとするカフカの主人公とは異なり、酔っぱらいのアンドレアスには未知なることが多々あり、そんな時彼には「不思議」に思える。最初に見知らぬ男から200フランを恵んでもらうことも偶然であり、彼のこれまでの偶然に身を任せて行ってきた人生の延長線上にある。

彼はこの恵みをまたしても酒に費やす。こうした生き方を象徴するようにこの物語では熟慮の末ではなく、「最初に」とか「一番目」という形容がよく見受けられる。例えば「途中通りかかった最初の新聞売り場に立ち寄った」や「道の途中の最初の店に」、「一番上にあった札入れ」や「一番近くに坐っていた女の子」等である。存在そのものを受動的なものとして捉えている。酒に溺れている自分の弱さすらも運命的なものとしてマイナスにはインプットしない。

確かに見られる自己がないわけでもない。久しぶりに鏡に写った自分をみてギョッとすることはあっても、そのことで落胆することはない。懐が暖かければ「ラム酒入りのコーヒー」を注文し、他人と同じような札入れが欲しくなる。享楽に浸ることにも心の悶えはない。カフカの主人公達の「自分は違うのだ」という極端な自尊心もその裏返しであろう劣等感とも無縁である。

獄に繋がれるきっかけになった人妻への思いや、依頼

主の奥方への恋心も誰でもが持ち得る心理であり、基本的には酒への依存性を除いてアブノーマルさはさほど感じさせない。

偶然、人と出くわすことで、借りたお金の返済に何度となく失敗するが、「返さなければ」という気持ちはいつも持ち続けている。昔の女との再会、学校時代に席を同じくした名を馳せたサッカー選手との偶然の出会い、巡業ダンサーとのランデブー、肉体労働をしていた時代のあまり質のよくない男との飲酒などなど、偶然がもたらすものに対してアンドレアスは分け隔てることはない。聖と俗が同居し、全てをあるがままに受容する。

滞在許可書を持たずに無宿を続ける彼には自分の生年月日も、苗字も忘却の彼方であった。最初に200フランの行幸があった日を自分の誕生日にしようと思ったぐらいである。カフカの作品と同様、体験話法が使用されるがそれは自分の殻を強固にするというよりは世界に自分を開こうとすることのように思える。「そうだ！ 人間の本性は偶然通りかかった運命が約束してくれるように思える。」

セーヌ川の橋の下を根城する者たちはアンドレアスにとって「運命をともにする者」である。買い求めた札入れの中から思いも寄らぬ1000フランが出てきた時にはもうその札入れを何故、どこで買ったのかも思いだせなかった。その刹那に身を任せる、その1000フランのことで運命に些か感謝しながらも、いつものベルノーではなく白ワインを呷る。

昔なじみのサッカー選手に借りてもらった部屋と同じフロアーに住む女性との内面での駆け引き、アンドレアスは相手が自分と同じように心の鞘当てをやっていることなど露程も知らない。「美しい娘の方も自分の方を伺っていることを彼は知る由もなかった。」彼はブルームフェルトのようにすべてを意識化する必要はない。彼が思い描く世界には空白がある。その女とのアバンチュールに出かける場所を「フォンテーヌブロー」と無意識に言ってしまう。

そうした女への思いで一杯になっている心にも聖テレーゼに200フラン返済しなければ、という気持ちはしっかりと刻まれている。

女に夜のうちに金を盗まれようと、まったく神など信じていない悪友ヴォイテクの唆しをも彼は従順に受け止めている。「それをお望みになったのは神様である。」返済できそうになると、そうした強かな連中によって妨げられてしまう。

またしても神は彼を見捨てることなくあの最初の男性を彼の前に助けてとして登場させる。二度目の200フランの行幸。またしても「明日こそは聖マリア教会」に行かなければと思いつつ、酒場「タリバリ」に足を向ける。酔っぱらったまま酒場で朝目をさますこととなり、飲み代に泊まり賃まで支払わなくてならず、また

しても返済が出来なくなる。

それでも神は彼を見捨てることなくもうひとつ恩寵をたれてくれる。旅券を持たないアンドレアスに警察官が話しかけてくる。びくびくしている彼に警察官は自分のものでない札入れを間違っ落とし物として返してくれる。今度もその財布には200フラン入っていたが、よからぬ友ウォイテックとの酒代となる。

そして聖マリア教会に赴こうとしたとき、突然胸の痛みを覚え、目の前に現れた同姓の別人のテレゼとのちぐはぐな会話の間に、彼女からも100フラン貰うこととなる。それを見ていたウォイテックは抜け目なく例のペルノーを注文し、二人で飲もうとしたとき「我らがアンドレアス」はズタ袋のように倒れ伏す。別人のテレゼに付き従われて漸く念願の教会に運ばれる。お金の入っている上着の内ポケットに手を伸ばそうとして息絶える。

自由奔放に生きているアンドレアスの心にもエンジンブレーキのようになり、「意を決して…」という力

が働いている。

カフカの物語が章立てもなく、独白のように畳み掛ける語りであるのに比して、ロートのは章分けされ、情景描写に近いゆったりとした語りである。事態を自分の思いの中に組み込もうとするブルームフェルトの内面が客観性を装おおとするのに対して、アンドレアスの心の赴くままにする行動は距離をとって描かれている。どちらの作品も語り手の主人公への思い入れはあるが、カフカの場合、語り手と主人公は中心が一つの円であるとすれば、ロートの場合は焦点が二つある楕円である。他者から身を引き剥がすことで「粒子」としての自分の存在を確たるものにしようとするブルームフェルトの物語と、他者との関係の中で波動として生きた、否、生かされたアンドレアスの話は対照的と言える。

なおこの二つの物語は平成20年秋のエクステンションセンターの市民講座のテキストとして使用した。